



キビタキ

名古屋大学博物館友の会 NUM 友の会ニュースレター No. 70 2023 年春号

実の表皮顕微鏡写真展グッズ売上金を寄付

野外観察園セミナーハウスで2022年秋に開催された「実の表皮顕微鏡写真展」に関連して、顕微鏡写真撮影者の生命農学研究科博士課程3年の加藤優太さんがグッズを作成、販売しました。展示期間中の限定で28点が販売され、売り上げ金の全額14,000円を名古屋大学博物館に寄附してくださいました。博物館での科学の普及活動に使わせていただきます。ありがとうございました。

Twitter もぜひご覧ください。いろいろな植物が顕微鏡写真で紹介されています。



Twitter
植物顕微鏡写真



吉田館長にお渡ししている様子

NUM 友の会の集いの開催時期については、現在検討中です。皆さんで集まるか、書面総会にするか、など、コロナ禍がもう少し落ち着くまで様子を見たいものです。でも、春は確実に。これからもニュースレターや博物館の行事をお楽しみください。

会員随想

春・夏に訪れる鳥を求めて

塚本啓互

私は博物館写真サークルに参加しており鳥花自然を主に撮影いたしております。中でも一番撮影しているのは野鳥です。野鳥は一年を通して観察できる鳥と、夏・冬の季節に観察できる鳥とに大別されます。一年を通して観察できる鳥は留鳥（りゅうちょう）といいスズメ、カラス、ハトをはじめシジュウカラ、メジロ、カワセミ、カルガモなどがあげられます。夏鳥は南の国から暑さを避けオオルリ、キビタキ、コマドリが飛来します。冬鳥は夏の暑さを避けシベリア方面で過ごし冬に訪れるカモ類、ジョウビタキ、ツグミがいます。旅鳥としては日本を春と秋に南北に通過するシギ、チドリがいます。漂鳥（ひょうちょう）は夏は山地、冬は平地または国内での移動をするものでヒヨドリ、ノスリ、ルリビタキがいます。



コマドリ

春先はカモ類などの冬鳥がシベリア方面に帰っていきます。春から夏にかけて夏鳥がこの地方にも訪れます。木立の多い森の公園に2~3日滞在するオオルリ、コルリ、キビタキ、コマドリなどが羽を休め繁殖地を目指して飛んで行きます。河口や干潟ではシギ・チドリが立ち寄ってくれます。

写真は名古屋市内の都市公園で撮影したキビタキとコマドリです。ゆっくり探せば名古屋でも色々な鳥に出会えます。どんなチャンスが待っているのか分からないので、カメラは常に携帯しています。

万葉の花 その8

ヤブツバキ

三矢保永

わが門の ^{かど} 片山 ^{かたやまつばき} 椿 まこと汝 ^{なれ} わが手触れなな

土に落ちもかも

物部広足 万葉集巻二十 4418

大意 我が家の門口にある片山椿（愛しい人の比喻）よ。ほんとうにお前、私が手を触れないのに、地面に落ちてしまうのだろうか（私がいけない間に、他の人のものになってしまうのだろうか、という寓意）。
注 防人の門出の歌とされています。片山椿は、片・山椿、あるいは、片山・椿とするかの二通りの解釈があるようです。前者は別れ別れになって残されてしまう妻を比喻（片は真でない半端のこと）、後者は奥山の急な斜面（片山）に生えている椿を意味し、好意をもっている乙女を比喻。“なな”、“もかも”は“ぬに”、“むかも”の訛り。椿は集中に9首詠まれ、すでに観賞用に身近に植えられていたことが分かります。日本に野生する椿にはヤブツバキとユキツバキがあり、ユキツバキは福井県から秋田県にかけての内陸側の豪雪地帯に、ヤブツバキは、夏泊半島を北限として、ユキツバキと棲み分けるように、日本列島に広く分布しています。椿は品種改良により、多種多様な園芸品種があり、街中でヤブツバキを見ることは稀ですが、徳川園の東北側に隣接する児童園には、剪定されない高木があり、3月初旬が見頃です。

参考文献：伊藤博 万葉集訳注 集英社文庫ヘリテージシリーズ



撮影 写真サークル 脇田光江

Artist Earth（地球は芸術家）20

柱状節理（columnar joint）

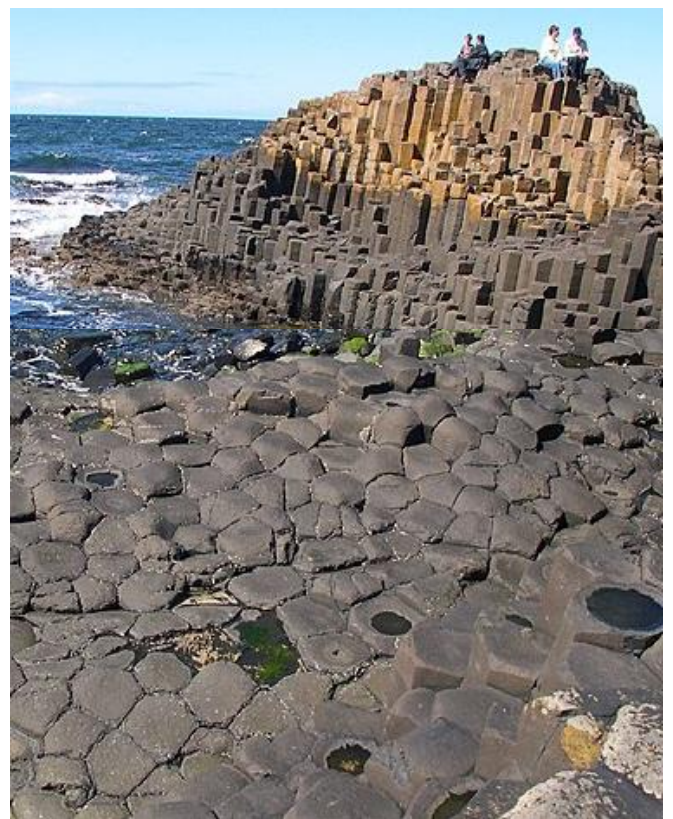
足立 守

写真は世界遺産に登録されているアイルランドのジャイアンツ・コースウェイ（Giant's Causeway、巨人の歩道）です。ここは巨人伝説の故郷ですが、地質学では約6000万年前に玄武岩の溶岩が冷えてできた規則的な割れ目（柱状節理）で有名です。

地上に噴出してきた高温のマグマが溶岩流として移動する時、溶岩流の上面と下面は内部よりも先に冷えて収縮をはじめます。収縮によってできた割れ目を使って、上下方向に規則的な柱状節理ができます。

では、柱状節理の上の端はどうなっているのでしょうか？ジャイアンツ・コースウェイでは、きれいな六角形や五角形をしていることがよく分ります（写真下部）。人物の近くの六角柱や五角柱をよく見ると、柱状節理と直角方向、つまり水平方向にも規則的に弱い割れ目が見られます（写真上部）。この割れ目は柱状節理に比べると不明瞭ですが、横方向から力がかかると割れ目に沿って簡単にはがれる性質を持っています。写真の人物はきれいにはがれた面に腰を掛け、自然石でできた大きな“ダルマ落とし”に座っているようにも見えます。

兵庫県の玄武洞もきれいな柱状節理で知られていますが、人間が割りやすい柱状節理に沿って玄武岩を切り出したため大きな洞ができました。



玄武岩の柱状節理

（ジャイアンツ・コースウェイ, Wikipedia より）

名古屋大学博物館よもやま その8 津波で流された8万点の海藻標本

野崎ますみ

今年の3月11日で東日本大震災から12年が経ちました。犠牲者は約2万2千人。その中には、いまだ2523人の不明者（2023年2月末）がいます。

あの津波では多くが失われましたが、博物館・美術館の収蔵品も例外ではありません。故吉崎誠東邦大学名誉教授※の海藻標本もその一つです。

藻類の研究者吉崎誠氏は8万点を超える藻類標本を製作しました。東邦大学を退職した後、標本の受け入れ先と研究拠点を海藻の採集地の一つである岩手県山田町の「クジラと海の博物館」に選び、2011年3月7日までに運び終えました。その4日後、津波が襲いタイプ標本※※を含む約8万点が流されました。その後、回収・修復された標本が約1万1千点、他にも東邦大学とご自宅に被災を免れた約6千点が残され、現在これらの多くは国立科学博物館にあります。

名大博物館にも標本番号がNUM-Bs0001から始まる吉崎誠海藻コレクションがあります。教育用の海藻標本181点は2004年に直接吉崎氏から寄贈されました。他にも数多くの海藻のスケッチ等があります。これらは吉崎氏が亡くなった後、東邦大学および弟子の鈴木雅大氏を通して寄贈されました。なかでも吉崎氏の藻類顕微鏡スケッチは科学的価値だけではなく、芸術的にもすばらしいものです。なお、名大博物館の吉崎海藻コレクションの登録数は341件となっていますが、スケッチはファイル1冊を1件として数えたと記憶しておりますので、1点1点数えれば、かなりの量となるはずです。



震災の翌年の2012年3月10日～4月14日に名古屋大学博物館では、企画展「吉崎誠海藻コレクション・震災と標本レスキュー」を開催しました。

2015年3月10日～3月28日には、スポット展示「名古屋大学博物館海藻コレクション・津波にさらわれた8万点の標本」も行いました。津波に覆われて泥の付いた標本や流された標本をどのようにして回収・修復したかを展示し、また科学と芸術を兼ね備えた吉崎氏の標本やスケッチなどもご覧いただきました。さらに名大博物館が参加した標本レスキューなどの紹介もありました。この2つの展示を通して多くの方々に標本の大切さ、科学の中の芸術性、災害における標本類救出とその組織作りの重要性を知っていただけたかと思います。

※吉崎誠氏は震災の年2011年9月10日に68歳でお亡くなりになりました。

※※生物の新種を論文発表するとき、基準とする標本を指定し、これをタイプ標本と呼びます。同時にその標本の保管場所も論文に記載します。新種の基準であるタイプ標本は博物館や研究機関で大切に保存されます。名大博物館でも昆虫やコケ類などのタイプ標本を保管しています。



吉崎誠氏のイラスト 作者は藻類の研究者の北山太樹氏（国立科学博物館）。バックに使われている海藻の顕微鏡細胞図は吉崎氏のスケッチ。

野外観察園 2023 春

吉野奈津子

観察園にも春が来て、今はコブシ、ボケ、サンシュユ、フクジュソウ、キブシ、モモと花盛りです。名古屋市内でもあっという間に桜の花が咲き始めました。皆さまのもとにニュースレターが届く頃には満開かも知れませんね。

いつ収穫しようかと思っていたパイナップルでしたが、鉢が倒れた時に果実は落ちてしまいました。しばらく博物館の受付にて、茶托に乗せられて飾ってありましたが甘い香りを放ってきたのでニュースレターの発送の日に試食会を行うことにしました。

12月19日、発送作業のボランティアの方、事務室にいたスタッフ数名でいざ実食。



Aさん：見た目もかわいいサイズで、香りもよく、味もおいしかったです。

B、Cさん：かわいいパイナップルに芳香抜群、味も満点でした。

Dさん：大変おいしかったです。甘かったです。

Eさん：とっても小さいのに完熟していてびっくりしました。美味しかったです。

以上は、有志の感想です。お世辞はなしで美味でした。お皿はソーサー、敷いてある白い紙はA4用紙なので本当に食べる部分はちょっぴりですが、食べられるものは楽しいですね。次は種から育てたパイナップルが食べられるようにがんばって育てます。



友の会 会費納入の報告

会計 松本晃子

2月末までの会費納入者数
177名（前納者含む）

今年度も会費を納入いただき、ありがとうございました。

納入に際しては、演奏会など今後の活動へのエールや、カレンダー・ハガキをご活用いただいているコメントもいただきました。会員の方々からのお声を聴くことができ、事務局メンバーの励みになりました。

寄付金の報告

会員の方より10,000円の寄付を頂きました。

コロナ禍で活動に制限がかかる中、ご支援をいただき心より御礼申し上げます。

会員の皆様楽しんでいただけるようなイベントを企画できるよう、活動資金として大切に使用させていただきます。

名古屋大学博物館友の会ニュースレター 2023年3月28日発行

名古屋大学博物館友の会 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学博物館 気付

電話：052-789-5767（博物館事務室） F A X：052-789-5896（博物館事務室）

Eメール：hakubututomo@gmail.com アクセス：地下鉄名城線「名古屋大学」下車 2番出口

ホームページ：http://www.num.nagoya-u.ac.jp/fan

年会費1000円（4/1～3/31） 10/1～3/31に入会した場合は500円（次年度は1000円）

家族会員制度あり（同居の家族1名まで年会費を免除）

<振込先> ゆうちょ銀行 口座番号：00800-8-166807 加入者名：名古屋大学博物館友の会

他銀行からの振り込み 店名〇八九（ゼロハチキュウ） 店番（089）当座0166807